

新領土・主権展示館メイキング—日本の領土について「考える場」の創設



高橋 徳嗣
(前内閣官房領土・主権対策企画調整室企画官)

はじめに—本稿の目的

1 新展示館のコンセプト

- (1) リアルの展示館が求められる必要性
- (2) リアルの展示館が果たすべき機能

2 新展示館のコンテンツ—コーナー別解説

- (1) 共通部分 (導入)
- (2) 北方領土コーナー
- (3) 竹島コーナー
- (4) 尖閣諸島コーナー
- (5) 共通部分 (結び)

3 結び—通過点としての新展示館：ウェブ連携と発信戦略の必要性

- (1) 新展示館開設以前のウェブを通じた発信状況の分析
- (2) 新展示館開設時に行われた基礎的なウェブ改修とその狙い
- (3) 領土・主権に関する発信強化の今後

はじめに—本稿の目的

2020年1月20日、領土・主権展示館は、日比谷から虎ノ門に拡張移転した。既に、『島嶼研究ジャーナル』第9巻2号¹において紹介されているとおり、拡張移転後の新しい展示館（以下「新展示館」という。）は、「領土・主権を巡る内外発信に関する有識者懇談会」の提言（2019年7月29日）²を踏まえて立ち上げられたものである。

1 高井晋「新設された領土・主権展示館」『島嶼研究ジャーナル』第9巻2号、106-109頁。
2 報告書及び概要は以下から入手可能。<https://www.cas.go.jp/ryodo/img/data/gaiyou.pdf> (概要) <https://www.cas.go.jp/ryodo/img/data/teigen.pdf> (日本語版)

この提言には、「内外環境の変化を踏まえた発信強化の実践のために」というタイトルがつけられているが、その内容は、単なる一般論ではなく、実践に移すことを念頭においた具体性のあるものが多い。この懇談会のメンバーは、2013年に内閣官房領土・主権対策企画調整室が設置されて最初に有識者懇談会が設置された時から続けて参加している方や領土・主権分野の取組に実際に携わってきた方ばかりであり、第一線で活躍する学識経験者というだけでなく、具体的に必要とされ、かつ、現実的に実施可能な取組が何かを考えるのに相応しい枠組の中で、有益な発想や考え方を目に見える形にすることができたといえるだろう。

このとおり、新展示館は、国内有識者の知見を集めて、領土・主権に関する日本の見解を内外に発信する拠点にふさわしい施設の在り方を議論した結果を踏まえて設置された。奇しくも筆者は、内閣官房領土・主権対策企画調整室の職員として、新展示館の立ち上げに企画段階から深く携わる幸運に恵まれ、本稿を通じて、有識者懇談会提言という青写真を実際の展示の中身に反映するにあたって、留意した点等を紹介させて頂ければ幸いである。ただし、本稿の内容は、すべて筆者個人の見解であり、文責は筆者に帰するので最初にお断りしておく。

以下、本稿においては、前半で、新展示館のコンセプトについて、有識者懇談会提言を実際の企画に反映した際の留意点をまとめ、後半で、新展示館内の各部分の展示内容において、新たなコンセプトや近年の資料調査研究の成果を踏まえ、何に留意し、どのような特徴を持たせたかについて、特に、これまで外務省や旧展示館における説明の仕方と比較して、補足した内容や見せ方の工夫などを中心に説明していく。

なお、新展示館の最大の特徴はウェブサイトと連携し、全体としてより大きな情報発信ツールの拡充を実現していくことにあるが、今回はこの点には深入りせず、本稿においては、本年1月に立ち上がった新展示館のコンセプトと展示内容を中心に説明することとしたい。

1 新展示館のコンセプト

(1) リアルの展示館が求められる必要性

新展示館の設置において最も意識された問題意識は、「なぜ、(今さら)

リアルな展示館なのか」であろう。新展示館のコンセプトには様々な要素が含まれるが、この、キー・クエスチョンに対する答えに還元して整理していくと理解しやすいと思われる。

現代のインターネット社会において、単に情報発信を目指すのであれば、ウェブ経由の方が、はるかに効果的かつ効率的である。ウェブは世界のインターネット利用者に対し、数百万、数千万の人々に発信できるのに対し、リアルな展示館は、東京の1か所でのみ発信できず、その利用者は、せいぜい年に10万人程度であろう。

では、ウェブ発信だけやっていたら十分であるのか。領土・主権に関し、政府のウェブ発信としては、外務省サイト「日本の領土をめぐる情勢」³がおそらく政府見解について最大の情報量を提供しており、内閣官房領土・主権対策企画調整室のサイトにおいては、より一般向けに内容を絞って分かりやすいコンテンツを作成し発信してきた⁴。いずれサイトも外国語に訳され海外向けにも発信されている。

しかし、領土・主権に関する情報発信について、国内と海外に対し、これらのサイトだけで十分とは見られていない。その理由は何か。いずれのサイトとも、コンテンツは工夫されており、仮に改善・拡充の余地があったとしても、それぞれのサイトのクオリティに問題があったとまではいえない。1つの大きな問題は、サイト間の連携がなくウェブ特有の関心誘導による相乗効果が発揮されていないというウェブ領域内の問題も存在するが、その点は後述する(以下3(1)参照)。ここでは、さらにウェブがもつ本質的な限界、すなわち、クリックして能動的に情報発信サイトにアクセスした人しか情報発信できず、クリックしない大多数の人は蚊帳の外に置かれてしまうので、ウェブ発信だけでは発信力が不十分という側面に焦点を当てたい。

3 <https://www.mofa.go.jp/mofaj/territory/>

4 現在の領土・主権対策企画調整室ホームページ中の以下のページで見ることができる。
<https://www.cas.go.jp/jp/ryodo/ryodo/hoppou-kousei.html> (北方領土)、<https://www.cas.go.jp/jp/ryodo/ryodo/takeshima-about.html> (竹島)、<https://www.cas.go.jp/jp/ryodo/senkaku/about.html> (尖閣諸島)

また、旧領土・主権展示館の展示コンテンツも以下のページで見ることができる。<https://www.cas.go.jp/jp/ryodo/tenjikan/archive/takeshima.html> (旧展示館—竹島)、<https://www.cas.go.jp/jp/ryodo/tenjikan/archive/senkaku.html> (旧展示館—尖閣諸島)

では、能動的にクリックしないより多くの人にクリックしてもらうにはどうしたらよいか。クリックしてもらうための態度変容(より正確には、日本の領有根拠に対するより深い理解)を誘引するための一手段として、リアルな展示館の設置が位置づけられる。

(2) リアルな展示館が果たすべき機能

では、リアルな展示館は、どのようなリアルならではの機能を果たすことが期待されるであろうか。そのような機能について、有識者懇談会提言でも数多くの視点が示されているが、ここでは、私なりに、このように分類すれば理解しやすいだろうと考える方法で、新展示館の特徴を説明してみたい。

ア 常設展示施設が有する象徴(シンボル)的表示機能—ちよっぴり真面目で大人っぽいコンセプト

領土・主権展示館という常設の施設を設置することには、北方領土、竹島、尖閣諸島などを含む日本の領土を守っていくという政府の意思を示すシンボルとしての意義があり、確固たる意思を貫いていくという姿勢を表示する機能があるものと考えられる。これは、日比谷に旧展示館が初めて設置されたときも同様の機能を有していたと考えられるが、地階に位置し建物の表に看板を出せなかったことなどと比較すると、1階で目立つところにある新展示館では、この表示機能は大幅に強化されたといえるだろう。

シンボルというと実体のない虚像のように聞こえるかもしれないが、全国民、全世界に対して日本政府の姿勢を示すアナウンスメント効果は、決して虚像ではなく、ウェブでは実現できない強い発信力を伴うものである。

領土・主権展示館は、このようなシンボルとしての機能を有する常設施設として見た場合、同様の機能を有する記念碑と対比させて考えるとわかりやすいと思われるが、そこで展示される個々の展示物の内容だけではなく、展示物の全体の構成やデザイン、また、展示館全体が与える印象も含め、総体としてメッセージを発信していることに留意する必要がある。

① キー・ビジュアルの制作—シンプルでモダン、ちょっとだけ大人っぽいデザイン

新展示館の設計に当たっては、館全体のデザインについて、全体のコンセプトを踏まえてキー・ビジュアルを作成し、そのイメージをもとに全体のデザインを作成している。そのキー・ビジュアルは、現在、展示館のロゴにもなっているが、そのデザインの検討に当たっては、展示内容が何であるか一目で示すこと（視認性）は当然のことながら、誰にでも受け入れられ、かつ、展示館に入りたくなる魅力を感じさせるものであり、さらに、政府の展示施設といってもプロパガンダの押し付けではなく、証拠資料を示してどの国の誰にでも理解できる説明を行う場であり（客観性・普遍性）、入ったからには少しだけ心して勉強して考えてもらう「学びの場」「考える場」となるように、わずかな敷居の高さを印象付けるようなものを目指した。その結果として、シンプルでモダンな、ちょっとだけ大人っぽいデザインとなっている。

② 北方領土、竹島、尖閣諸島キャラクターの使用—生徒・児童を念頭においた親しみ易さ

新展示館は、生徒・児童に対する教育現場での活用も意図されているので、子供向けに親しみやすさを表現する観点も考慮されたが、遊びの場というよりも「学びの場」であることを重視し、少し背伸びさせるようなところを狙っている。その一方で、児童・生徒を遠ざけることにならないよう、展示には、北方領土、竹島、尖閣諸島それぞれについてシンボル・キャラクターを配している。

北方領土と竹島については、それぞれ、(独)北方領土問題対策協会において「エリカちゃん」、島根県竹島資料室において「リャンコちゃん」のキャラクターが使用されていたので、新展示館での使用許可を頂いた。尖閣諸島については、キャラクターがなかったため、領土・主権対策企画調整室、沖縄県、石垣市で調整して「アルバちゃん」というキャラクターを制作した。

なお、旧展示館において、島根県及び石垣市の観光プロモーション用キャラクターが使用されていたが、いずれも竹島及び尖閣諸島には直接関係しないモチーフ（猫、鷺）で描かれており、また、韓国人、中国人

等を含む外国人観光客の誘客目的で使用する必要もあることなどから、新展示館においては使用を控えている。

イ 空間を生かした直感的な展示機能—「学びの場」「考える場」を提供するための間仕切り

続いて、リアルな展示施設の最大の特徴は、いうまでもなく、物理的な空間を活かして、展示面、展示機器、レプリカ等を通じて、パソコンやスマホの画面では表現できない、より直感的な説明が可能となる点である。

新展示館におけるプロジェクション・マッピングや大型のスクリーンやディスプレイ、ジオラマ、レプリカを展示するショーケース等の展示機器については、既刊の『島嶼研究ジャーナル』第9巻2号においても紹介されており、実際に新展示館に行ってみればわかるところでもあるので、改めて解説するまでもないであろう。

ここで、特に取り上げたいのは、新展示館の間仕切りについてである。

上述と少し重複するが、新展示館においては、単に日本の領有主張を並べたてるのではなく、戦前から戦後に至る歴史的に長い時間軸の中で、多くの証拠資料によって客観的な裏付けを示しながら、来館者が納得できるように領有主張の根拠を1つ1つ説明するとともに、充実した各論の説明が全体の大きな文脈の中で捉えられるようにしていくことを目指している。

① 広いグラフィック展示面の確保

「学びの場」「考える場」に相応しい空間を実現するため、まず、第1に、北方領土、竹島、尖閣諸島それぞれについて、展示面をしっかりと確保できるように、全体を開放的にはなく、小房に間仕切りをしている。各部屋の左右には、4～5m程度の広く連続した展示面を作り、水平に時間軸となる線を引き、途切れのない時間の流れをイメージできるようにしている。

これにより、都合のよいところのみをつまみ食いするのではなく、時間軸を基準として切れ目なく、網羅的な説明をしていくための展示の大枠を確保できる。旧展示館ではポスターサイズのパネルを並べる展示方法がとられていたが、新展示館では、展示面全面にグラフィックを描く